

NEXT CONCERTS

>> 次回東京定期演奏会

第 **774** 回

サントリーホール

プレートーク 八木 宏之氏

2025年10月17日(金)19:00開演 18:30~

18日(土)14:00開演 13:20~

助成:



文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人日本芸術文化振興会

文化庁
Agency for Cultural Affairs,
Government of Japan

新たな息吹で挑むショスタコーヴィチ、
今の日本フィルを体感せよ!

指揮: **カーチュン・ウォン**

【首席指揮者】

ピアノ: **小川 典子***

トランペット: **オッタビアーノ・クリストーフォリ**

【ソロ・トランペット】*

ショスタコーヴィチ:

ピアノ協奏曲第1番 ハ短調 op.35*

ショスタコーヴィチ:

交響曲第11番《1905年》ト短調 op.103

1回券料金 S ¥9,500 A ¥8,000 B ¥7,000 C 完売 P ¥5,000 Ys (25歳以下) ¥2,500

※障害者手帳をお持ちの方は割引がございますので、サービスセンターにお問い合わせください。

Amnesty Opera
ショスタコーヴィチ
没後50年



©Patrick Allen
operaomnia.co.uk



©井村 重人

©Ayane Sato

次回東京定期演奏会指揮者にインタビュー!

カーチュン・ウォン 編

きき手 八木 宏之

マエストロが日本フィルと演奏する2曲目のショスタコーヴィチに選んだのは、交響曲第11番《1905年》です。今年は作曲家の没後50年のアニヴァーサリーでもあります。第11番を取り上げられる理由をお聞かせください。

交響曲第11番《1905年》は、声楽などが含まれない純器楽の交響曲で、ショスタコーヴィチの15曲の交響曲のなかでも特に優れた作品です。以前、日本フィルと演奏した第5番(第756回東京定期演奏会)は英雄的な華々しさで人気がありますし、第10番も謎めいたメッセージを秘めた作品として高く評価されていますが、第11番はその真価がまだ理解されていないように思います。第11番の魅力をもっと多くの方に知っていただくのに、作曲家の没後50年は絶好の機会ですので、今回取り上げることにしました。

一第11番は、ショスタコーヴィチの交響曲のなかでも、ソビエト政府のプロパガンダ的な性格が強い作品に位置付けられています。マエストロの作品解釈はどのようなものなのでしょう?

第11番は、帝政ロシアによる圧政のなかで民衆が抱く恐怖心を見事に描いた作品です。そうした抑圧は、最終的にデモ隊への機銃掃射へと至ります。恐怖政治を乗り越えて、それに立ち向かっていく音楽であるという点では、ソビエト政府のプロパガンダ的な作品とも言えるでしょう。しかし、皆さまに注目していただきたいのは、そうした表面的なプロパガンダの裏側にある、音楽としての純粋な凄みです。この交響曲を、目を瞑って

聴いてみると、描かれている情景が目の前に次々と浮かび上がります。ショスタコーヴィチの優れたオーケストレーションが可能にした、映画音楽にも負けない写実性は、この交響曲のなによりの美質だと思います。

一オーケストラが描き出す無慈悲な虐殺には、思わず息をのんでしまいます。

ソロモン・ヴォルコフの『ショスタコーヴィチの証言』は信憑性が疑わしい本ではありますが、そこにはスターリンに怯えるひとりの作曲家の姿が記録されています。ショスタコーヴィチは、常に誰かに監視されている世界に生きていました。彼はまた戦争の恐怖しさを、身をもって体験した人でもあります。第二次世界大戦で、ショスタコーヴィチの故郷、レニングラードは文字通り戦場となり、彼は兵士たちと同じ地獄を経験しました。第11番で描写される銃撃やその後の静けさには、実際にそれを目撃した人にしか書くことのできないリアリティと生々しさが含まれているのです。

一前半に演奏されるピアノ協奏曲第1番は作曲家初期の代表作で、交響曲とは全く異なる明るいキャラクターを持った音楽ですね。

ピアノ協奏曲第1番は若き日のショスタコーヴィチの機知に富んだ、自由な空気を感じさせる作品です。若い頃のショスタコーヴィチの書法はこのように開放的なものでしたが、ソビエト政府の監視を受けるなかで次第にそれは閉じたものへと変化していきました。この協奏曲には独奏トランペットのオブリガートが付いており、とてもユニークな作品に仕上がっています。小編成のオーケストラによる新古典主義風のテクスチャは、交響曲第11番で聴かれる大編成のダイナミックな響きとは対比的で、プログラムにははっきりとしたコントラストをもたらすでしょう。

一方で、この2曲には共通点も見出せます。どちらも全楽章がアタッカで繋がっていて、一息で語られる作品であること。もう一点は、両曲とも劇的な物語性を持っていることです。そうした共通点がありながらも、そこで語られる内容は正反対で、協奏曲ではアイロニーを秘めた、サーカスのような楽しい時間が過ぎていき、交響曲では歴史的な悲劇が大きなスケールで展開されていきます。お客様には、劇場で2本だてのお芝居を鑑賞するような感覚で、この演奏会を楽しんでいただきたいと思います。

一ピアニストの小川典子さん、そして日本フィルのソロ・トランペット奏者、オッタビアーノ・クリストーフォリさんとの共演にも期待が高まっています。

小川典子さんとは今回が初共演となりますが、彼女がロンドンを拠点に、ピアニスト、教育者として幅広い活動を展開されていることはよく存じ上げています。彼女のような高い志と広い視野を持ったアーティストは、音楽界にとって貴重な存在ですし、そうした方と共演できることを今からとても楽しみにしています。

オットー(クリストーフォリ氏の愛称)は、私の大切な友人です。指揮者は自ら音を出すことはできませんが、彼は私が求めていることをいつも完璧なたちで実現してくれます。オットーのようなトランペット奏者と出会えたことは、私にとって幸運なことでした。彼は今日の日本フィルの顔と云うべき演奏家のひとりであり、常に前向きで、努力を惜しまないオットーの存在は、オーケストラにとって決して欠くことのできないものです。プログラムの前半に協奏曲のソリストを務めたあと、後半の交響曲でも演奏に加わる首席トランペット奏者を、私は彼以外に見たことがありません。自分が皆を引っ張っていくんだという思いが彼を突き動かしているのでしょう。今回、小川さんとオットー、ふたりの素晴らしい音楽家とショスタコーヴィチを演奏できることを心から嬉しく思っています。